

# 平成29年度環境測定分析統一精度管理ブロック会議議事録

-東海・近畿・北陸支部-

日時 平成30年3月13日(火)13:30 ~ 16:00

会場 アオッサ 研修室 601BC(福井市手寄一丁目4-1)

## 1 開会

## 2 挨拶

福井県衛生環境研究センター所長

大村 勝彦

## 3 議事

### (1) 環境測定分析統一精度管理調査について

環境省水・大気環境局総務課環境管理技術室長補佐

石関 延之

### (2) 平成28年度環境測定分析統一精度管理調査結果について

一般財団法人日本環境衛生センター環境事業第二部課長代理

佐々木 秀輝

### (3) 環境測定分析における留意点及び精度管理について

国立研究開発法人産業技術総合研究所

地質情報研究部門地球化学研究グループ長

岡井 貴司

環境省環境調査研修所教官

藤森 憲弘

国立研究開発法人国立環境研究所

資源循環・廃棄物研究センター主任研究員

山本 貴士

## 4 質疑応答

(参):参加者 (助):助言者・有識者

### (1) 模擬排水試料 (COD、BOD、ふっ素、ほう素、TOC)

(参) 棄却後のデータでも蒸留操作によるCVへの影響が大きいと感じる。今後、こうした方法が公定法から除外される可能性はあるか。連続流れ装置におけるCVは他の方法と比べて低かったか。

(助) 棄却後のCVは約7%であり、それほど悪い値ではない。蒸留操作による結果を見ると測定値は約8.5であり、合格ラインには達していると考ええる。公定法は幅広い機関が参加できるよう設定されている。連続流れ装置といった高額機器に頼らない方法も残しておく必要がある。連続流れ分析法の公定法導入の際には、室間精度で約20%以下であることを導入条件にしていた。

環境調査研修所ではイオンクロマトでの蒸留操作は何年かやってこなかったが、来年度以降、機器分析研修のイオンクロマトグラフィーの実習テーマとして新たに取り入れていきたいと考えている。自動流れ分析法を用いるのも1つの方法だが値段が高く、地環研で時々しか測らないサンプルに対してコストがかかりすぎるということも

ある。

(参) TOCを2チャンネル法で分析したところ、TCに対してICが非常に低く、IDLより低い値だったため1チャンネルの値を採用した。ヒストグラムを見る限りでは良い結果に見えるが、全ての参加機関でICは定量下限値を満足していたのか。満足していなければ、評価結果は間違っていることになるのでは。

(助) ICはほとんどないので、ほとんど測定誤差のようにになっている。逆にICが多い場合、正確な値になるかどうかを調査しなければいけないかなとは思っている。1チャンネルと2チャンネルの方式の違いによる差は出ていない。今回の試料に関してはICの値は1mg/L以下となっている。

## 5 次期開催機関挨拶

京都市衛生環境研究所 環境部門担当係長

若林 佳弘

## 6 閉会